

十二月二十五日

休呆堂で荷造りを終えて帰宅する。悩んだのはPop。塔の小林信也さんがシベリアを見ながら山口百恵を聴く歌を読んでいたのに触発され、ガンガーで百恵を聴きたくなったのだ。

ガンジスの畔で百恵の歌聴かば人生観は変はるだらうか

「荷物は用意できたの？」

「はい」

そのような会話があり、よしよしは入浴をすませると寝室に上がっていった。まもなく階段を下りてくる音がした。リビングルームのドアを開けるやよしよしは咎めな口調で僕に言った。

「あの無呼吸の器械、持って行くんでしょ！」

「……」

「まさか持っていないと言う訳じゃないでしょうね。」

「……」

「ほうっておいたら、持っていないつもりだったんじゃないの。あんなに荷物がいっぱいなら、これ幸いに持っていかないとおこうと思ったんですよ。いつからなの、そう考えていたのは。いったいどれだけ息が止まっていると思っているの。半端じゃないんだからね。あの荷物、半分にしてももって行きなさいね、わかった！」

「……はい。」

「それにまだそんなに飲んでて。明日車に乗るんでしょ、大概にしなさいね。」

「いや、その、これで最後だから……いえ、はい。」

よしよしはそれだけ言い残すと二階に上がっていった。

リュックからトレーナーを一枚取り出し、そこにシーパップを押し込むことにして寝ることにした。寝室に行くとしよしは明かりを消してベッドに潜り込んでいた。僕は真っ暗な中で手探りで自分の寝場所を探り当て、いつものようにシーパップを装着して眠りについた。

十二月二十六日

朝、目覚まし時計を鳴らさぬように手を伸ばしたらどう弾みか床に落としてしまった。電池がどこかに飛んでいる。電池を入れるところの蓋はあったのでとりあえず蓋はして電池は探さず起きることにした。シーパップをリュックに詰めサイドバッグも詰め込んで、荷物は一つになった。

八時前に家を出る。駐車場で像の小袋がじやまになると思い、中身のカードと車のキーを詰め直し、赤間駅に行った。八時十二分発のきらめきに乗れそうだったが、ネットで調べると快速は四分遅くても五分しか到着時間は変わらない。で、予定通り八時一〇分発の快速に乗る。博多駅で乗り換えに少し走ったら、悠々五〇分発の地下鉄に乗れた。ネットで調べたきらめきの場合と同じ地下鉄だ。やった。健脚なうちが華さ。

かなしみを君のベッドに置いていく憂ひは傍への小箱に詰めて

空港に着くとポストと国際線行きのバス停を探した。バス停の少し先にポストはあったが、バス

が発車しそうな気配を示していたので、見ると五九分発とあった。そのバスで行こう、と乗ってしまふ。短歌研究投稿はがきを出さなくてはいけないのだ。国際線ターミナル見渡せど見つからない。ゆっくり探そうとしたら木村氏に会ってしまった。なもんで木村夫人にお願いして木村家の年賀状と共に投函していただくことになった。

で、売店に行き、変圧器を買う。四〇〇〇円弱のにした。これで携帯の充電もシーパップも大丈夫だ。

森川夫妻が一〇時近くに到着する。噂通りのすてきな奥様である。まあいい。我々は預けるに持たが少くないので楽々搭乗手続きは済ませられた。集団であることがわかるとまとめてやってくれる。world trianceなのでANAだがJALで手続きとなる。よくわからん。

後は余裕で出国手続き。売店でペットボトルの茶を買う。一五〇円。

搭乗する。窓側の二席は森川夫妻。その後ろに木村シスターズ。さらに筑女ガールズ。森川夫妻の並びの通路側に僕。その後ろに木村さんという配列だ。

柵を捨てて異国へ旅に出つ置き去りしものは不機嫌ばかり

機内では当然飲み物が出る。シンハービールは切れ、Changビールをもらう。悪くはない。これもタイビールなので一つ知識が増えたと考えよう。

森川さんはよく飲む。ビールを飲んでいたかと思うとブランデーなんかも手を出している。酒飲みだったのだ。

日本語の本は結局ヒンディー語の会話本だけであつた。しかし、多くの日本人乗客が読んでいるものを盗みみれば、ほとんどが行き先に関わるものを読んでいる。地球の歩き方はもちろんのこと、旅行記の類やグルメ本などだ。臨席の人はタイの食べ物の本を読んでいるし、森川さんは小熊英二の『インド日記』のようだ。

異国への機内で人はそれぞれの行先示す読書に励む

ヒンディー語の会話本は成功であつたかどうかはわからない。パラパラとめくってはみたが、意欲はわいてこない。日本語の本を持ってこなかったことを少し後悔する。短歌を作ろうにもいいアイディアは浮かばない。森村誠一の『小説の書き方』に触発されて書き始めた文章を少しじってみる。プロットを考えずに書き始めたので先が進まない。

バンコクで空港内で時間をつぶす。木村一族とタイ料理もどきタイの麺を試みるが、百八十バーツもして量がきわめて少量で呆然とする。文章の練習をしたかったので、スタバに入る。i-modeの国際化をはかるがなかなかうまく送れない。金もけっこうかかるといふし、少しいらする。どうにもならないので、コーヒーを飲みながらしばし文章の練習に没頭することにした。コーヒーはミディアムが百十バーツ。

二十時発なので十八時半が待ち合わせ時間だった。待ち合わせ場所近くのトイレに行こうとしたら筑女ガールズが屯している。時間潰しに飽きて退屈を持て余していたようだ。しばし雑談をして待ち合わせ場所へ行く。

そろつたところでC6ゲートへ。ゲートゾーンのかなりさ気にあるので、けっこう歩いた。まだ、待合室入口は開いてなかったの、しばし待つ。僕らはだばうと待っていたが、さすがチームリー

ダーの木村さんが異変に気づく。どうやらC2aゲートに移ったんだということだ。急ぎ戻ることにした。C2aゲートはキーとゾーンの入り口にある。よく歩かされる。

C2a待合室で待たされるがなかなか動かない。二十時三十分頃になってようやく搭乗できた。席はだいたい前機と同じ配置。臨席はインド人の親子三人連れ。三、四歳の子どもだがしばしばご機嫌を悪くするので父親に抱かれてあやされている。

民族の差ほどに文化の差はなくてぐずる子あやす親心かな

機内食は出ないかもしれないと思っていたが、出た。ベジかチキンか、だ。すでにインド料理であった。

映画が各席で見られる。『after bad』だったっけか。訳せば『卒業後』みたいな映画だった。バンコク行きの機内でも字幕付きでやっていたと思うが、よく見てなかったのじつくり見ることにした。字幕はなかったが、さっき見ていたこともあっておおむね理解した。しかし、よくわからない終わり方をする映画で駄作ではあった。

印度まであと二時間余機内には印度の民の濃き息遣ひ

コルカタに到着。木村さんが急ぎ足でいく。そうそう、かつてかなり長時間並ばされた記憶が蘇り、早足になる。インフルエンザAのチェックのために例の温度感知器で検査される。我々は軽くクリアだったが、前の人たちがやたらと長かった。次いで入国手続きもずいぶん待ったが、なんとかクリア。さらに荷物検査やらたづなりやってEXCHANGEに行く。なんとTICは交換しないと言う。幸い生ドルが多めにあったので百五十ドルを交換。六千二百六十ルピーをゲットする。しかし千ルピー札がなんと四枚も。どうしよう。ここで何人かいろいろ戸惑ったようで時間を食う。

伝染病の流行る国より来し者と此の印度にて烙印捺さる

お迎えの方をしばし待たせた。お迎えは非常に立派なマイクロバスであった。コルカタの街はすごい喧噪であるとともになぜか路上に衝立を置き、車のじやまをしている。おかげで渋滞もしばしばの状態であり、あるところでは二枚の衝立の間を我らがバスは通り抜けられず、衝立をどけて通った。

宿泊はHotel Circular。スナックの入口みたいなドアを開けて入る。怪しげな色電球がロビーを飾っている。パスポートを預け、部屋ごとに書類に代表者がサインをする。終わると畳一条ほどもある宿帳に一人一人サインするという具合だ。日本でこんなにチェックインに時間をかけていたら大変なことになるがここではノープロブレムなのだろう。パスポートのコピーはまだ続いていた。

部屋は木村さんと一緒。なんとダブルベッドだ。シャワーは何とか湯は出る。インドでこれは上等だ。なにしろ☆☆だという。

われわれの部屋にとりあえず集まり、うちあわせを終えて解散した。時計をインド時間の〇：〇〇に合わせる。

木村さんが先に湯に入る。洗濯もしている。僕もそれに倣うことにした。

コンセントには穴が五つ。真ん中のにシーパップを入れたら動く。少し弱い感じがしたので変圧器を使ってみる。快調だ。携帯の充電器を入れる。うまく行く。これで電源の心配はない。下の二つの穴が空いているので iPod の充電器を差し込んだらブフツと煙を吐いた。ぶっ飛んでしまった。あとは極力使わずに持たせよう。せめてガンジス河で山口百恵を聴くまでは。

十二月二十七日

旅の疲れからぐっすり眠れるはずだったが、道路を走る車の爆音と警笛の嵐は半端ではなかった。もしかするとダイハードの新作のロケでもしているのかと疑ったくらいだ。

静けさを美德となさぬ国なれば慣れぬ私が不謹慎かも

もちろん朝は問題なく起床し、木村さんとチャイを飲み散歩に出る。チャイはニルピーであった。この姿を一部の筑女ガールズに窓から見られていたらしく、翌日は引率することになる。

朝食は八時に一階のレストランでとる。

トーストにオムレツとバナナ。ジャムもある。それとミルクティ。八時半に朝食を終え木村さんの指図で五十分までに身支度を整え集合。

ハウスに向かう。マザーハウスはすぐ筋向かいというくらいの近さである。マザーハウスでマザーテレサの墓を見、マザーテレサに関する展示を見る。午後にはスペイン語のミサがあると掲示されていた。どうでもいいことではあるが。

ハウスを出るとマザーテレサの孤児院に行く。現在九二人の孤児がいるとのこと。以前木村さんと来たときに偽善について議論したことを思い出し、ふたたび考えようとしたが、ここは偽善者であることを否定しないことに結論づけ相応に寄付をすることにした。僕は一〇ドルの寄付をしたが、もっとも高額だったのではないだろうか。木村さんがとりまとめていたが、名義は木村名義にしたと言う。うーむ。偽善についての論争は続けるべきであったか。

ボランティアは今日は日曜で休みだと言う。高級ホテルに泊まり、そこから通ってくる外国人（日本人）ボランティアも多いという。それを偽善と言うことは優しいが、しないよりは役に立っている。それでいいのではないか。必要なのは労力であり、その人の背景ではない。それにいかなる動機であれ、ボランティアに時間と労力を使うことはそれをしていない自分がどうこう言える問題ではない。尤もボランティアを労働力に使うという為政者に問題はあってもボランティアの力を借りることに、ボランティア自分の余力を使うのも正しいことなのだ。

その足で New Market に行く。またあの煩わしいガイドがついて来るのかと思うと気は重かったが、あのときは木村さんと二人だったし、と気を取り直して New Market に向かった。

日曜なので New Market は休みの店が多かったが、食肉市場は壮観であった。中には「Cow!」と陽気にそのまんまの尻尾を振ってみせる男もいた。処理された肉の塊にまだ皮のついた尻尾がついているのだからおかしい。にしても印度で牛の屠殺とは。貴重なものを見た。ま、明日は店ももう少し開いているだろうから今日のところは引き上げることにした。

コルカタの肉市場にて尾のつきし牛の肉塊売られてをりぬ

牛の尾を陽気に降りて指し示すインドの市の男逞し

で、その後映画でも見ようということで映画館に行くも、三時からのマチネと、六時からのナイトは満席で十二時からのヌーンには余裕があり、あずみちゃんの尽力でゲット。少し時間があつたので一階のKFCで簡単に昼食を各自とることにした。いちばん安いのを二つで六十五ルピー。しかし、それぞれ慣れぬものゆえ全員が食べきつたのはギリギリであつた。

チケットからは席はどこかわからない。が、そこにはちゃんと案内人がいて（インド人の客もわからないのだ）、「あつちのはじつこからだ」と教えてくれた。先導したおかげで僕はいちばん左端の席に相成つた。見にくいかと思つたが、始まってみるとそうでもなかった。

映画は『3 Idiots』という学園もので、封切りしたばかりの作品のようだった。奇想天外に話の展開するコメディで細かい内容や会話などはよくわからなかったが、十分楽しめた。

ストーリーのよくわからない映画見て中途半端に笑ふカルカッタ

映画が終わつて St. John's Church までお散歩した。外観を見るだけで十ルピーとられる。コルカタでいつも思うのは建築物の妙である。古い建物がぼメンテナンスされずに使われているばかりでなく、上に不自然に増築されている。この教会の周囲にもそういう建築物が多々あつた。少し早めであつたが、おなかも空いたので木村さんが翌日に予定していたインド料理店に行くことにした。途中交差点の歩道上で物売りをしているところで学生たちがビーチサンダルの交渉を始めた。交差点の乗り物の動きがおもしろいので動画に撮る。

「ここは Great Eastern Hotel の前です」

と木村さんが教えてくれる。おお、確かに見覚えがある。十年前に初めてインドにきたときの妻子をの宿が Great Eastern だったのだ。懐かしい。しかし、このホテルは取り壊されるのだという。果たして street に向いた方、つまり顔はそのままだがそれ以外はすべてすでに解体されていた。

目的のレストランに到着する。確か以前にも来たことがあると思う。

森川さんと「これはビールですね。」と意見というか、欲望は一致していた。浮き立つ気持ちで Kingfisher を注文したら、「本日はない」という。ほかのビールでもいいからと言ってもダメだった。今日はフェスティバルなので酒類はないのだという。フェスティバルこそ酒だろうし、もしかしてフェスティバルの連中に買い占められたのかと思いきや、どうもイスラム系のフェスティバルらしく飲めそうにないのだつた。まあ、そういうのも一興だとこの日は諦めることにした。

タクシーで帰る。木村さんの交渉でマザーハウスを目標に六〇ルピーということとなり、帰ればちょうど六時であつた。

八時にミーンティング。マザーテレサの孤児院にみなそれぞれの感動をしたようだったし、映画も楽しかったようだ。

九時にミーンティングを終える。木村さんが眠そうなので、灯りを消して僕も寝ることにした。ずいぶん歩いたので心地よい疲れが眠りを誘う。このまま朝まで眠れたらインドで極楽と言うところかもしれない。

ドンドンドンという太鼓の音で起こされた。まさに叩き起こされたのだ。時計を見ると0時五分だった。太鼓の音というのは日本の祭りを彷彿とさせる。フェスティバルの行進なのだろうか、ホテルの前の道路を行きつ戻りつしているようだ。それにあわせてかけ声も日本の「わっしょい」に似た感じで聞こえてくる。窓辺によって見たが、過ぎ去った直後だった。しばらく見ていたら太鼓の集団が通った。そうだ、写真を撮らなくちゃ、カメラを取り出して構えたが今度は来ない。待ちきれずいったんベッドに入とうとうとするとまた音が大きくなった。シーパップをはずし、カメラを持って窓辺に走る。そんなことを何度か繰り返し、太鼓の集団や白いお城の模型みたいな神輿（と言えるか）を運ぶ人たちなどを写すがうまく写らない。しばらく苦戦したあげく諦めて眠ることにした。しばらく夢の中にまで太鼓のリズムが染み込むような中で眠りについた。そして五時のアザーンを聞いたときフェスティバルの喧噪はすっかり消えていた。

イスラムの夜祭り明ければコルカタは静けき街と錯覚をせり

夏ばてのやうだと君はつぶやきぬあやはり麦酒が欲しいはずだよ

貧困の臭ひを景氣が隠しをるコルカタの街は嘘つきかねて

二十八日

朝は全員でモーニングチャイを楽しみに散歩。

朝食も昨日通りだが、朝食からバナナが消えていた。それもインドだ。

九時に集合し、荷物をホテルに預けて、タクシーでカーリー寺院へ行く。タクシーは少しマザーハウスの方に歩いたところにたむろしていてそこで交渉する。木村さんの値切りは厳しく八十ルピーで交渉成立する。タクシーはまさに人をかき分けカーリー寺院へたどり着く。メーターは五。百ルピーかかるところだったみたいだ。

カーリー寺院は以前より警戒が厳しくなっていた。ぐるりと外観を見る。異教徒の我々の中には入れないので、マザーテレサの死を待つ家に行く。死を待つ家には三度目の訪問になる。最初来たときには清掃中で誰もいなかった。それでそんなものかな、という程度の感想であった。二度目に来たときはおりしもクリスマススの礼拝かなんかでミサの最中に入り込んでしまった。で、ミサが終わるまで出られなかった記憶がある。その時も収容者と思われる人は目に入らなかった。そういうわけで三度目にして初めてここで死を待つ人々と出会うことになった。

ベッドにはずいぶん多くの人が収容され、ボランティアの人たちが忙しそうに行き来している。日本人らしきボランティアの人が来客に対応していた。胸にSUMIKOと記されている。はなしで話している英語の発音がまさしく日本人だ。彼女も我々の存在に気づいていたらしく、僕たちの方に来てくれた。「なにが聞きたいですか」と言われたが、そういわれて何か質問できるほど僕たちは無知であり、自ずと彼女の語るまま耳を傾けていた。やがて奥にある女性収容者の部屋へ女性たちを案内して連れていった。置き去りにされた男三人はただぼと人の動きを追って見ていた。

ボランティアでアジア系の男性が優しく一人の病人と対話している。言葉はそう通じないだろうにただ暖かく接している。人間を人間として扱うというそれだけのだろうかそんな当たり前のことですらもしかしたら私たちの最期に行われるだろうか、否、行ってきただろうか。

【人間の最大の神への貢献は平和の中に死を迎えることである】

みたいな揭示にぐつときた。正確な英文は失念したが *if peace* は覚えている。これを「安らかに」と訳すべきか。ちと悩んだので、このままにしておく。英文を書き写してくるべきだったな。

世に生れて生きるすべは奪はるるせめて神ならよき死を与へよ

幸福に生きるといふを知りたるは我ら至今の夢ごとにして

死にむかふことの幸せ想ふ人を横目で僕は旅を続ける

豊かさは罪であるかも我が生の罪深きこと尚深めつつ

人間の生の佳きこと誰ぞ知る人知らず知らざる人然り

此の家に匿はれしは幸いかなあまたの民の酷き死想ふ

経済の発展遂ぐる此の国のあまたの民は未だ貧しく

強者のみ富を占むれるをろかさを信念とする政治家多し

SUMIKOさんもそうだし、目の前の青年もそうだが、どのようないきさつでここに来ているのだろう。以前タイのエイズ患者のための週末施設でボランティアをして挫折する話をテレビで見たが、やはり同じことで、半端な気持ちでできることではない。

ずいぶんたつて女性たちが戻ってきた。階上を見てもいいと言われたそうなので階段を上る。屋上があり、カーリー寺院がよく見える。屋根にびっしり洗った布が干してあった。

生きてゐる人の暮らせる証として死を待つ家に洗濯物干さる

死を待つ家はいささかショックであった。SUMIKOさんが語ってくれた様々な収容者たちの話は一つひとつが悲惨な物語であった。それをここに書き綴るのも意味がないことではない。しかし、それは僕の体験ではないし、僕の体験ではないものを書き綴る勇氣はない。

話をうかがって思うことは二三ある。

インドという社会が凄まじいのは社会的格差が露骨に顕在化していることである。帰国してすぐにたまたまテレビで映画『ガンジー』をやっていたので、ついつい見てしまった。映画の中でガンジーは「差別をなくす」と明言していたが、その差別が描かれていたとは思えない。映画自体は植民地支配の不当さとガンジーの非暴力の抵抗とを描こうとしたものであるからそこまで及ばなかったのかもしれない。しかし、それから半世紀以上たつてなお差別は顕在化したままであると言えよう。インドにはヒンドゥー教のカースト制度が残っていて、そこに差別があるとはよく言

われる。それは間違いない。しかし、カースト制度は、これは日本の近世における身分制度と共通するものであるが、カーストの移動は難しいが、カーストによって守られているものもたぶんあるのだと思う。たとえば清掃などの卑しいとされる職種があるが、ある意味その職は保障されているのである。これはかつての日本の被差別身分の人間がたおれ牛馬に関する特権を有していたように差別的扱いであると同時に職を独占する権利も持っているはずなのである。

実際、そうした職に就いている人々は豊かな状態ではないだろうが、仕事には就いているのである。ならば現実には起きている貧困はカースト制度だけの問題ではないだろう。そのあたりはインド社会についての社会学的な研究でも読む必要がある★。この家の外に出ればカーリー寺院をめぐる繁華な街であるが、やはり社会的格差が露骨に示されている。カースト制度は確かに社会的格差の根底に存在はしている。しかし、貧困の問題はカースト制度だけではなく、政治と経済の問題であるにちがいない。

死を待つ家を出る。地下鉄の駅まで歩く。人混みを腰だめにしたデジカメで動画に撮っている。なかなかおもしろい風情で撮れる。

地下鉄は五人切符を二枚買うことになる。五人ぞろぞろと連なって回転棒を回し入構する。Park Streetで下車すると街中で、再びNew Marketに行く。今日はもう少し店が開いていることを期待してのことだった。少しおつきあいに店をひやかして行くとアクセサリー屋があった。そこで、よしよしのためにピアスを見繕う。かわいいのがあったので二セット買う。少し行くと今度は高級な宝飾店があり、ここはかなり上等なものが売られていた。森川夫妻は、というより森川夫人は興味を示された。それならと僕も見てみる。やはり高級品はお遊びのアクセサリーとは違う気品がある。気に入ったのがあったが森川夫人も関心を示された。しかし、彼女はもう少し小さいのが欲しいと言うので、「それじゃあ僕がもらった」と手に入れることにした。インドでこんなに高い買い物したのは初めてだ。

で、森川夫妻とつきまとうガイドを振りきって外へ出るとなんと筑女ガールズが退屈そうに待ちかまえていた。で、西脇、中西、苑田曰く。

「夏バテ状態っす」

夏バテとはよく言ったもので、確かに夏バテだ。麦酒が恋しいとはこういうことなのだな。

みんなが揃ったところでお昼。今日はブルースカイで昼食にすることにした。ブルースカイは外国人旅行者の集まるところでそれを見るのが目的だ。タイミング良く十人の席が確保できた。カレー各種とナンだ。殊に欧米系の旅行者が多い。

日本語が聞こえた。若い女の子の二人連れて、カナダ人らしき中年男に声をかけられはしゃいでいる。注文したものがポツポツ出てきて食べ始める。外国人開いてだけあって手際がいい。まだ飲み終わっていないラッシーをあつと言う間に片づけられてしまった。料理はまずは満足。おおかた食べ終わって精算するとエッグカレーが来てなかった。精算しなおしてもらおう。その対応も早い。ここだけインドではないようだ。

食後、サダムストリートからリクシャに乗ってホテルに戻ることにする。マンパワのリクシャは減ってきたというので乗り納めかもしれない。いったんホテルアショカのあたりまで行くが、リクシャ探しに木村さんは学生を連れて戻るのが、なかなか帰ってこない。

「どうしたんだろう」

森川さんが不審そうに尋ねる。

「値段の交渉をしているんでしょう。こちらもやってみましょうか」

「どこで降りればいいのかな」

「マザーハウスまで行ってもらえばいいんじゃないですか。わかりやすいし、ホテルはすぐだから」と話してたら目のあったリクシヤマンがやってきた。交渉してみる。

「マザーハウス、ハウマツチ？」

「ワンハンドレッドルピー」

「んー、エクスペンシブ」

「フィフティ？」

「ノー」

「フォーティ？」

「ノー」

「ハウマツチ？」

「トゥエンティ」

とカマをかけると、パイとそっぽを向いて行ってしまった。でも、四十と二十の間なら行けるという確信をつかんだ。

またしばらく木村さんを待つが、来ない。

「行ってみますか？」

少し先のリクシヤに交渉する。とんとんとすみ、三十五ルピーで話が付いた。で、ご夫妻を乗せて送り出した。ややあって木村さんが戻ってくる。そちらではどうしても五十ルピーより下げなかったらしい。

「どうやって帰りますう」

「歩くんじゃなかったつけ」

「けっこう遠いですよ。それにこれからまだだいぶ歩くし、僕らもリクシヤにしましょう。」

と木村さんの意見に従い、四十ルピーで乗った。マザーハウスの前に集まると、学生が百ルピー払ったという。一人五十と突っ込まれたらしい。木村さんが飛んで行って文句を言っている。どうやら取り戻したらしい。これをきちんとしないと舐められるわけだ。木村教訓その一というやつだ。ホテルに戻ると森川夫妻がお待ちになっていた。預けていた荷物を受け取り、さあ出発だ。

果物市場を目指す。しかし、市は終わっていた。言わば祭りの後の雰囲気だった。かすかに果物のかすかな匂いと藁くずが残っている程度だった。こも以前来たことがあるが、記憶が今一つ戻ってこない。少し行くと人だかりがしている。覗いてみると男が二人棒を持って打ち合っている。乱闘と言うより、棒術の演武のようでもあった。武術に関心の薄い木村さんはそそくさと歩いていく。やむを得ずつき従う。

市場を出たところで街に入ったが、ここは覚えていた。市が開いているかどうかで景觀が全く異なるのだな。今度は花市場に飛び込んだ。おおっ、ハウラー駅の近くに來たぞ。

花に囲まれた市場の中をどんどん突っ切っていく。木村さんは突然左に曲がった。あたりが真っ暗になる。屋根があるのだ。通路も狭い。そこを抜けるとパツと視界が広がった。ハウラー橋の付け根あたりの河原に出たのだ。散らかっているゴミに鳥と鳩が群がって啄んでいる。我々も鳥のように荷を降ろして一服することにした。

ポツツと何かが肩に落ちた。やられたかな、と思ったが、見上げると木の枝に鳥が留まり、果実のかけらをかじって食べ残しを捨てているのだ。こりゃたまらんと木の下から逃げ出した。

木村さんは橋を撮ろうとしてそのあたりの市民に「橋を写すと警官が飛んできますよ」と忠

告されていた。そういえば橋も国家機密なのだった。そんな完全に公開情報みたいなものに隠すそぶりをするところがわかりにくい。

十分休息して橋を渡る。橋の上はさながら人の川だ。濁流ではなくさらさらと流れていく人の川だ。これまで岩に揉まれるような人の波をかき分けてきたので、いくぶんほっとする。

陽がいくぶん傾き始めている。ほどなくハウラー駅に着いてしまった。とりあえずファーストクラス待合室に行く。ここで荷物を棚に縛り付け時間をつぶすことにした。いつものことではある。待合室内の売店で水と茶を売っている。水十二ルピーを注文すると「ティー？」と聞かれる。僕はチャイを飲んだ。四ルピーだった、はずだ。後で誰かが五ルピーだと言って、確かめに買ってみたら五ルピーだった。

まずは木村さんの案内で構内をざっと見学して夕食のあたりをつけ、各自思い思いに過ごす。僕は待合室で書き物をする。子どもがよってきて *pomera* を珍しそうに覗き込む。チャイなんか飲みつつ。

五時頃に食事に行くが各自自由ということになった。木村さんたちはサンドイッチショップに行く。僕と森川夫妻は左隣の定食屋に行く。三十七ルピーのノンヴェジ定食がねらいだ。しかし、人の雰囲気がおかしい。森川さんが注文するとディナーは七時からだと言う。がっくり来て木村さんたちのコーナーに行く。うまそうなカレーのセットを食べている人たちがいるがどこで注文するのかわからない。サンドイッチのところでチキンサンドを注文する。しばらく焼け上がりを待ちようやくありつく。いわゆるホットサンドだ。うまいが五十ルピーは高い。食事を終えて右隣のコーナーを通ったらこっちでカレーのセットを売ってた。こちらで買い求め、真ん中のテーブルで食べていたのだ。しかも三十何ルピーとお値段もお手頃だ。食べたいものを食べるためにもっと活動的であれと反省した。

待合室に戻って思い思いに過ごす。木村さんの関心はタクシー乗り場だ。待合室のバルコニーの下にタクシー乗り場がある。間にある客の待つ安全地帯を挟んで二レーンに次々タクシーが入ってきて、安全地帯に待つ客を乗せていく。客は適宜乗っていくのだが、その順番が怪しい。このレーンだけで五台くらいは停車してあふれるようにやってくる客を乗せていくのだが、客は混乱なく乗り込んでいく。見ていると整理係のような人間が手配しているようなのだ。白い制服のようなものをきた男とチョッキを着た男が客の差配をしていると同時に運転手と何か書類の受け渡しをしている。入構切符かなにかのチェックをしているようだ。

しかし、並んでいるタクシーを追い越すように別のタクシーが何台も現れて客を拾うのだ。ここにさっきの係員のようなのがやってきて制止したり(何しろ順番を守っていない)、チケットのようなもののやりとりをしたり、時に乗客を導いて乗せたりしている。このルールがわからない。

さらに赤いショールをまとった又三郎のような小柄な少年っぽい男が列外のタクシーの間を飛び回って何かしている。いったん前述の男たちにチェックを受けたはずのタクシーの運転手からまた何か受け取ったりしている。そしてまたひらりとあっちのタクシーに飛び、またこちらのタクシーへとショールを翻して飛び回っているのだ。はじめはじゃまをしているのかと思っていた。案の定チョッキの男に胸ぐらを掴まれ、高く持ち上げられたのだ。乱闘か、と思ったが、小柄な彼を持ち上げてじゃれていたらしく、すぐさま楽しそうに舞い始めた。この男の役割がわからない。このタクシー乗り場の秩序のシステムがわからない、と木村さんは言い、ついその疑問を、解くべくこちらもついつい観察してしまうが、やはりわからない。

そんなこんなで時間を潰し、夜を迎える。木村さんはいったん「発車ホームを確認してくる」

と言って出ていったが、まもなく「そろそろアナウンスがありそうだ」と戻ってきた。列車の発車時刻は時刻表的にはわかっているが、実際はそのときにならないとわからない。我々の乗るドーンエクスプレスは八時に出る予定だ。

「八時近くになったのでその時間帯の案内が出始めている。とりあえず待合室を出よう」

という木村さんの指示に従って駅の中央広場に出た。女性の声のアナウンスが響く。一つのメッセージを流すとパラパラランとピアノの音みたいなのが鳴る。それと前後して掲示板にも案内が出る。

しばらく待つと

「ドーンエクスプレス、八時二十分：プラットホーム：」

と来た。そこで間をおき、

「：ナンバーエイトオオオオ（パラパララン）」

と抽選会の当選発表のように発車ホームが知らされた。思わず「やったあ！」と叫びたくなった。

籤引きの当たり番号でも言ふやうに構内アナがホームを告ぐる

次は客席の確認である。ドーンエクスプレスは長い。八番ホームに行き一キロほどあるのではないかと思うのだが、ずいぶん歩いて自分たちの乗るべき車両にたどり着く。程なく乗客名簿が貼り出された。

寝台があちこちに飛んでいる。どうしてまとめてくれないのかと木村さんはいぶかしむがそれがインドなのだろう。寝台は向かい合わせの座席がそのまま寝台の上下となるのと通路に即して上下の寝台とがある。寝台と通路の間にカーテンは敷かれるが、向かい合った寝台同士の間にはカーテンはない。我々の隣席はインド人の女性が一人きりであった。ガヤまで行くのだという。なので木村さんは少し離れたところに行ってしまった森川夫妻と我々の隣席の女性に替わってもらおうと交渉したが、無碍もなく「No」と断られた。すでに替わってもらってここに来たからだという。

僕はホームに降りオレンジを一キロ買った。車内でインドを楽しむために。

八時三十五分。Doon Expressは何の舞うぶれもなく、そして何の説明もなく、そつと動き出した。

ホームにてオレンジ一山購ひぬ一夜限りの贅沢として

ひつそりとドーンエクスプレスは動き出す神が導く証のやうに

はばかりつ会話をなせるベンゴリはわからぬやまとの方言に聞こゆ

此の国の女性とベッドを並べ寝ぬ只「ライト？」と云ひ灯を消しぬ

名も知らぬ駅にそつと停車せり午前二時をまはつたあたりで

夢を見てゐる我が身にもカタカタと列車の呼吸聞こえて来れり

真夜中に列車の揺れで目を覚ましオレンジの香でかはきうるほす

日本の卑俗な夢で目を覚ましオレンジを剥き気を落ち着ける

黙々とドンエクспレスは闇を行く浅き眠りの旅人を載せ

ガヤまでとかの女性は言ひをりし真つ暗な中そつと降りゆく

十二月二十九日

夜が明け始める。木村さんが降りてきてかの女性のいなくなった後に移ってきた。他のメンバーも徐々に集まってくる。チャイ売りがやってくる。

重きチャイ運び売り来る少年が未練がましく三度過ぎゆく

ジーンズの破れを若きチャイ売りにからかはれてるやまとをみなご

十二時十分、バラナシに到着。駅前で木村さんはサイコリクシャを交通手段としてねらうという方針にしていた。しかし、降りた周辺にそれほどの数はない。それで、通りの方に行くオートリクシャが屯している。で、オートリクシャにしようと交渉を始めたが、運転手がみな示し合せているので値下げに応じない。で、あきらめて駅の方にすこし戻るとサイコリクシャがいた。交渉を始めると思われるサイコリクシャが集まってきた。一台四十ルピーでまとまる。

二人づつ乗って行くが街中で超渋滞となる。何かと思ったら飾りたてられた像が道を横切っている。何かのお祭りなのだろうか。コルカタで聴いたのに似た太鼓の音も聞こえる。像の後ろから旗指物のようなものも着いてくる。それらが左側の小路から右側の小路へと渡り、そして消えていった。

道は溶けるように流れを早くした。全員が集まるのを待って木村さんがこの一帯の説明をする。その間、男が一人まわりついていろいろ話していて、名前を教えろと言う。どうやらホテルに案内すると言っているようだ。よけいなお世話だ。木村さんに従い、メインガートから回ってホテルアルカに到着。以前にも泊まったホテルだ。お気に入りのホテルである。ホテルに向かう途中とある学生は牛糞を踏んづけてしまった。最初の一個を踏んだとき指摘したのだがまもなくもつと大きくて新しいのを踏んでいた。

そんなことはともかくこのホテルでの部屋は五つ。阿弥陀籤で決める。筑女Aが南側三階のガンガー寄りの部屋をゲットする。ここは最高の部屋だ。見晴らしが絶対にいい。以前来たときにこの部屋に泊まり、ベランダに椅子を出して歌作に耽った記憶がある。僕らはその一つおいて隣の部屋。森川夫妻は北側のガンガーに面した部屋。ただし、こちらはベランダに猿よけの網がかかっている。

それぞれの部屋に荷物を置くとホテルを出た。狭い小道の中にあるメグ・カフェという食堂に

連れて行かれた。木村さん曰く。

「インド料理で疲れた胃にやさしい日本の味を」

「まだ、インド料理は疲れるほども飽きるほども食べてないし」

ともかく昨年、一昨年とダウンした人がこの店のお粥で救われたんだと。はいはい。で、すごいメニューなのだ。まずはおすすめのかき揚げ丼をいただく。なかなかボリュウムのあるかき揚げがタツプリ載っていて別添の汁をかけていただく。実においしい。かき揚げは野菜を中心にサクリ揚げられている。インドではパーム油をよく使うのだがここでは大豆油を使っているのだそう。

ご飯はインディカ米なので日本の井物の食感とはだいぶ違う。それで汁は別添だったのかと思う。インディカ米に日本的な汁をなじませておいしく食べる工夫がそこにあった。

ホテルに戻って僕はシャワーを浴び旅の疲れを癒すことにした。木村さんは学生たちを連れて火葬場を見に行ったようだ。僕はベッドで解放された状態でこの旅日記を書き始めた。

EMZ を開きかき揚げ丼の報告を書くときマイミクから「何で印度でかき揚げ丼なんだ!」という書き込みがあった。ふん、人間というものに対する考察の足りない奴だ。

日が落ちてしばらくしてから木村さんたちが帰ってきた。夕食にふたたびメグカフェに行くのだ。暗い夜道なので足下に気をつけなくてはならない。僕は懐中電灯を持って出た。牛の糞を踏んでしまうからだ。案の定、先ほどの学生は再び踏んづけていた。しかし、徐々に馴れてきているようで、むしろ牛糞に愛着や憧憬の念を抱いている者もいる。

牛糞を神の慈愛と歌に詠む女子学生の美しき指

再びメグ・カフェ。今度は麺類に挑戦してみる。塩ラーメンだ。塩ラーメンと言えば函館だ。昨年の五月に函館で塩ラーメンを堪能した。殊に知己であるとおやま酒店主にご馳走になった塩ラーメンは旨かった。と、懐かしんでも仕方ない。ここはインドなのだから。出てきたのは野菜たっぷり、のまさしく塩ラーメンである。スープの味付けは実にいい。通りがかりの牛を絞めてその骨で出汁をとったものではないだろう。たぶん元氣よく鳥屋の店先にいた鳥ではないか。野菜のうまみも上手に引き出してある。麺は…、そう、麺が問題である。地の果ての国インドでいただくのだ。めぐさんはどうやって塩ラーメンを作り上げたのだろう。麺を一口つまみ上げ口に入れて、一瞬の唇のふれあいを楽しむやらずと啜る。果たして…それは塩ラーメンであった。しかし、函館のそれとは違う、メグ・カフェの塩ラーメンだ。今まで未体験であった食感だ。細目の麺で蕎麦のようでもあるが蕎麦粉の風味はない。ラーメンかと言えばかんすいの匂いはしない。独特の麺だ。もしかして昨日森川さんが食していたかき揚げ蕎麦の麺もこれだったのではないだろうか。全く食文化の異なる国で旅に疲れた同胞に癒しのひとときをまさに恵んでくれるメグさんの心意気を感じた。気がつくときスープの最後の一滴まで飲み干していた。

その夜は特にすることもなく眠りについた。何しろ翌朝は早起きなので。

十二月三十日

バラナシはのんびりするために来たのだ。心と身体にいい時間を作ろう。

そんなわけでガンガーの上で日の出を拝むのが今日の始まりだ。六時十分に起床。そろったところで出かける。ホテルを出たところで少年が木村さんと親しげに話している。昨年、一昨年とこの少年のボートに乗っていると言う。これに乗るしかないが、それでも木村さんの交渉はきびし

い。二時間二百ルピーで交渉は成立する。

少年は我々が到着したときから見ていたと言う。木村さんの顔は覚えやすいのだろう。年齢を訊くと十五歳だと言う。日本の十五歳とは、比べてはいけなないが生活感覚がちがうのは確かだ。成田姫が漕ぎたいというので並んで漕がせてもらう。なかなかお似合いにも見える。彼がしっかりしているのか、彼女が若いのか。おそらく彼が大人なのだろう。さらに真弥ちゃんが少年と替わって女性二人で漕いでみる。なかなか難しい。

ボートから降りて朝食をとる。朝食は二階のテラスのレストランだが南側のガンガーに面して突出した一等席を使わせてもらう。ここはいい。飲み物としてティーをポットでもらう。これはお得であった。食後、森川夫妻はゆっくり休むと言う。木村さんは若者をサルナートに連れていくそう。どうするかと訊かれたが、ここは僕も僕の時間をもらうことにして、居残ることにした。部屋に戻る途中階段のところに風が引っかかっているのを木村さんが見つけた。絡まった釣り糸をほぐすように丁寧にほぐした。後で揚げなくては。

おお、大事なことを書き忘れていた。しばらく便秘で悩んでいた木村さんが「出た」そう。おめでとう。

なわけ、部屋に残って書き物をしていた。そしてメールをチェックしたら deomo からお知らせが来ていた。なんと world king の月間利用額が停止目安額に近づいたという確認メールと生産の場合の連絡先メールだ。慌ててその連絡先に電話する。クロダという人が出て五万円の契約のところ三万六千円に達しているとのこと。それでのメールが行ったのだろうということだ。

「えーっ！」

どうしたらいいかを相談すると、この支払いをクレジットカードですることになる。さもなくば一ヶ月の上限をあげるかだな、などと言われる。旅先で落ち着いた判断もできないのでとりあえず上限を十万円にあげてもらった。たぶん limit をやっていさせいだろう。というわけで limit 禁止令を自分に課した。あまり日本との関係を引きずったままで外国に行くのはよくない。そういうあたりまえのことをついつい文明の利器に溺れるうちに忘れていたのだ。まずは外国は日本を断ち切りに行くのだという旅の基本を承知せねばならない。

昼食はオレンジで済ますことに決めていた。インドのオレンジは好きなのだ。十一時二十分になったのを見計らい街に出ることにした。迷路のような道を歩いてみた。男一人で歩いているとあまり客引きの声はかからない。しかし、「ハッパ！」という声は二度ほどかかった。大麻のようなのだろう。危ない、危ない。聞こえないふりをしてやり過ごす。メグ・カフェを見つけようと思ってうろうろしたが、見つけれなかった。歳をとって土地勘が衰えたと実感する。少し悲しかった。雨が少し落ちてきた。えっ？乾季だろうに。

そういうわけで街の果物屋でオレンジニキロ(七十ルピー)と水ニリットル(二十二ルピー)を買っそそくさとしてホテルに戻る。三階への階段のところに隣家の小窓の奥から女性の歌声が聞こえる。合唱の練習のようだ。部屋に戻ってから合唱の声はずっとしていた。オレンジを二三個食べ、ベッドの中でうとうとしていると、異様に喧しい歓声で目が覚めた。何かと思って出てみるとホテルの下の斜面になった壁を登れるかどうかを競っては楽しんでいる歓声だった。

そうだ、若者たちに「特等席のベランダを借りるよ」と言っていたのを思い出した。外でオレンジを食べながら歌でも詠むことにした。見下ろすと二階のテラスで森川夫妻がランチをとっているのが見えた。恋人同士のように見えて、それでいて長い時間が熟成させた果実酒のような深みのある情愛がその一帯に醸し出されていて、その空気が二十メートルほど遠くまで伝わってく

る。あてられるというのはこういうことを言うのだろうか。おそらく旅を共にしている学生たちは自分たちの恋愛の未来がこのようなものであることに憧れてしまうのではないだろうか。いい夫婦であるということはそれだけで教育的なのだろう。

僕もしばらくここで過ごすことにした。ガンガーの眺めは最高だ。先ほどの若者たちはいつの間にか姿を消し、昼下がりのガンガーは静かな時を流れている。時間という感覚もガンガーの前では人間の作り物にすぎないことを知らされる。ふと振り向くと僕たちの部屋の前に猿が一匹まるで訪問者のようにぼっと立っていた。いや、そう見えただけなのだ。猿は僕の気配に気づくとささっと姿を消した。

猿を撮ってやろうと部屋に戻りカメラを持ってきて次のチャンスを狙った。しばらくじっとカメラを手に猿を待ったが、賢いやつらは二度と僕の前に姿を見せなかった。だいぶ離れた屋根の上からその先の樹木のあたりに落ち着き、こちらを遠目に見ているだけだ。

森川夫妻は食事を終えたようだった。夫人はガンガーの方を見ながらスケッチのようなことをしている。定年後絵を趣味として本格的に楽しまれているという。曇り空の少し冷えた気温の中のガンガーは長閑ではない。ある種の不気味さを醸し出している。森川夫人の絵筆はどのようなガンガーを描き出すのだろうか。絵心に乏しい僕にはどのように描いたらいのかは想像がつかない。しかし、描かれた作品は見てみたい。

森川氏は道子夫人の邪魔にならぬよう気を配りながら、見守るように後ろに佇んでおられる。ふつうならビールを手にとりたいところだが、ここではビールは無理なようだ。の意味静かでゆったりとした夫婦の世界がそこに作られていく。そこだけ時間がゆっくり流れるように見える。僕は観客が入り込めない映画の場面のようにじっとその空間を見入っていた。夫婦であることの幸福がすべて凝縮されているような空間がそこにはあった。僕はガンガーを前にして死についてではなく、よき人生について考え始めていた。

なのに、なのにある。無粋な、あまりに無粋な若者がその場に闖入してきたかと思うと風揚げを始めたのだ。そして若者はいい風を探しながら森川夫人の傍スケッチの視角を遮る形で風を操り始めた。何ということだ。まったく空気の読めないやつがここにもいるのか。しかし、風揚げの技術はこれがなかなか巧い。巧いのだが、あまりいい風には恵まれないようで、若者はしばらくトライした後、立ち去った。

陽が少し翳り始めたようだ。今日は天候があまりよくないし、気温が低い。このままでは風邪を引いてしまう。そう思い、椅子もオレンジも部屋に持ち帰り再びベッドの中で pomera に向かうことにした。

まもなく木村さんが戻ってきた。サールナートの話聞き、僕の半日を語る。そして風揚げの話になった。それで先ほど手に入れた風を揚げるよう木村さんを促した。なにしろ彼の出身地である長崎県（彼は長崎と言っても…とぼやいていたが、よそ者にとっては長崎県であることにちがいはない）は風揚げ（ハタというらしい）で有名なところなのだ。ベランダに出て、しばし試みたがうまくいかない。まあ、もとより遺失物のようなものだから仕方ない。

ガンジスに風揚げたしと君は言ひ拾ひし風にて思ひ果たせり

で、風揚げをよして部屋にはいると、木村さんは娘さんたちが昨日火葬場に行かなかったのかこれから行くけどついてくるか、と問う。退屈していたので、「もちろん」と即答すると身支度を

整え一緒に外に出た。雨は降っているわけではないが、時折ぽつんと当たるものがある。

火葬場まではそう遠くはない。こっちへ来い、というような案内を買って出る人がいる。自分は何になにも金は取らないからこっちへ来いとよくわけのわからないことを言う人もいる。適当に無視して様子を眺めていた。インドの人たちはほんとうに親切なのか、それともしたたかに小金を稼ぐことに執心しているのかよくわからない。この場合ややこしくなりそうなのでスルーと決め込む。

火葬の現場には牛や山羊そして犬がうろうろしている。突如キャンキャンという音が聞こえて目をやると犬が人に棒で追われていた。

「牛や山羊は花を食べているようだけど、犬は肉食だからね」と木村さんがささやく。

「そういうことだな」

ま、あまり気持ちのいい話ではない。

「あっちへ行ってみますか」

木村さんの指図で火葬場をわたってその先に行く。両側に出店が出ている小道を抜けると火葬場の外側に出てしまった。

「これ以上はないみたいです。戻りましょう」

木村さんの言うのには逆らう余地はない。

「そうしようか」

再び元の道に戻ると

「今度はこっちから行ってみましょう」

「だいじょうぶかい」

「大丈夫ですよ。通路なんですから」

そういう木村さんの後を遅れじとついていく。木村さんはぐいぐい火葬場をガンガーの方に降りていく。道の両端にこれから焼かれるであろう遺体が、無造作に右に三体、左に一体、締めて四体寝かせてあった。まだ煙の残っている焼き後が二つ並んでいるところを横切る。火葬の炎がゆれているそばを通るのはやはり勇気がいる。声が出ない。二人の娘さんたちも押し黙ったままだ。何とか煙に噎せながらそこを抜け出した。足がもたっているのがわかる。異次元を旅してきたような感覚に圧倒されて重い沈黙が僕たちの空気を支配した。

ガンガーの冷え込み始む火葬場の遺体焼く火に暖をとったり

火葬待つ遺体は列をなしてゐて此岸の人を急かしてをりぬ

「六時過ぎにメインガートでちょっとしたイベントがあるんですよ。一緒に行きますか？」

木村さんが僕に勧める。そりゃこの旅の目的はくつろぐことではない。イベントとなれば、見に行かぬ手はない。時間が少しあるのでいったん部屋に戻った。

気持ちを整理し治してから木村シスターズを伴い、六時前くらいにホテルを出て、メインガートに向かう。

「ほれ、こうして一人でやっている人もいますけどね」

見ると、一人ガンガーに向かって祈りを捧げている人がいる。宗教的な厳肅さがひたひたと伝わってくる。祈りをこうして行うということ自体、信仰心に乏しい僕には余りに遠い世界だ。先を

見るとあかあかと照らされて何かが始まりそうな処であった。

「夕暮れにこの祈りは始まるのですよ。まだかなあ。」

木村さんは浴浴とこの祈り、つまりプージャーについて語り始めた。こちらでは集団でプージャーの祈りが始まる場所であった。白い衣装を身にまとい、先ほどの一人きりの祈りとは全く異なっている。ショーアップされていると言ってよい。

「ボート、ボート」

とボートに乗らないかと薦めに来る男がいる。こんな暗くなってボートに乗ってどうするんだ。クルルに断わる。

「エハガキ、百ルピー」

今度は突然子どもが絵はがきを売りに来る。わらわらと物売りの少年たちがそれに続いてあらわれ、しつこくものを売りつけてくる。いずれも買えば必ず後悔する品でしかないことはわかっているのだが、なんともこれが聖地ガンガーの風物詩でもある。風物詩ではあってもやはり好きにはなれない。

すぐにプージャーは始まった。灯りの照っている方に更に進んで行くと、川の上にボートがぎっしり埋まる洋に浮かびその上からカメラを構えている人たちが居る。先ほどのボートの誘いはこれだったのか。まさに「祈り」がショービジネスになっているのだ。物売りも多い。いたいけな少女が火をつけて流す花を売っている。この少女は僕が最初ここに来たときにはまだ生まれていなかったはずだ。そして僕が旅を休んでいる間にいっぱしの花売りに成長したのだろう。そういえば「深夜特急」に出演し、そのギャラで自分の店を持ったという少年はどこに行ったのだろうか。もう成人しているはずなので、そのあたりの物売りのあんなのかもしれない。

だいたいプージャーの概要がわかったところでチャイを飲んで区切りを付ける。ここでは五ルピーと値段も高い。いい商売になっている。チャイを飲み終えると七時に近くなっていた。約束のメグ・カフェに向かうことにした。小雨が降り出してきた。ポツポツと雨を感じる。

神の意に沿ふか浴はぬかプージャーの経済効果よ民に夕餉を

ガンガーに向かひて祈る人ありてそれを見る人物を売る人

沈みゆく陽に惜別の灯を捧げ天地の神秘に人は祈れり

「明日は早朝にバスに乗ってブッダガヤまで行きますけどね、食事はどうしますかね。」

木村さんが言う。常に先のことで考えているのだなと敬服するしかない。これだけの人間を連れて旅をするための見通しなのだ。長いつきあいだが、教育史学会で名事務局長というのが何人かいる。一に挙げられるのがO女子大のY氏。彼はすごい。法制局長官と森川代表理事が評されているような人だ。もう一人はN大のO氏。この人によって教育史学会の実務はずっと支えられてきたと言っているくらいだ。殊に亡くなられた佐藤秀夫先生の活動を支えてきたのは彼だったろう。で、僕が推したいのは木村さんだ。僕は何度か彼に助けられている。九大に着任して間もない頃だが、当時の金子教授が九州教育学会の事務局長を務めておられたが、その時の実務を木村さんがやっており、その時以来事務能力については一目置いている。九大で教育史学会の大会をやったときも、僕が編集委員長をやったときも事務局長として要になってくれた。そうい

う人物である。だから、こうした旅もすべて甘えきることができなのだ。その叡智の一片でもこういう機会に学生諸君は学んで欲しいと、切に願う次第だ。

「バナナという手もあるよね。」

「そうか、そうしましょう。それを買っていきましょう。」

そう言って街に出た。

中年男が親しげに近づいてくる。こいつも物売りだ。町中の自分の店に来いと言う。自分の店かどうかはさておき客引きであることに代わりはない。さらに若い男が寄ってきた。こいつも怪しげな日本語を駆使して自分の店に連れていこうとする。急いでいることを告げると名刺を押してつけた。

「それじゃあ、明日来てくれ」と言う。

名刺をポケットに入れて、彼らをあしらうと果物屋でバナナを買った。バナナは一本ニルピーだ。次いでオレンジがおいしかった話をする。木村シスターズがオレンジを食べたいという。で、彼女たちはオレンジの交渉をする。一キロ四〇ルピーだった。しかし、木村さんたちのオレンジ選びは周到である。果物屋が適当に一キロを計ると、一つひとつ点検し、何個か取り替える。それを果物屋がさりげなく入れ替える。そうしたら木村さんがずっと一個戻す。というやりとりをしている。

「なにしろ元がミカン農家ですから…」

まあ、いい。それより雨が本格的に降り出した。メグカフェに急いだ。乾季だということにどういことだ。独特の細い小径をかき分け、雨を凌ぎながらメグカフェに着いた。すでに森川夫妻は到着していて、注文も終えていた。一度に注文して厨房が混乱しないようにとの配慮だという。そういう配慮が大切なかもしれない。苑田・成田組が遅い。どうやら道に迷ったようだった。だいぶ遅れて、しかも雨に濡れて到着した。森川案の時間差注文はナイスショットであった。今夜は親子丼にした。このように汁気の多い丼物とインディカ米は相性がいいと思うが、丼に入っているので食べにくさはある。日本より味を濃くした方が合うのかもしれない。というのは後日タイ料理を食したときに思った。

ガンジスに季節はずれの雨が降り罪深きわが肩を濡らせり

夕食後、ホテルに戻る。突如停電となり、再び灯りはつくがシャワーが出ない。自家発電で電灯はついているのだが、シャワーは電力会社が回復するまでダメだという。木村さん側のソケットは電気が通らず、僕の方は大丈夫だったので、呼吸器は使えた。

夜中に目が覚めた。怪しい声に誘われるように外へ出てみる。ガンガーはわずかな陸の光を集めて薄紅色の闇に佇んでいる。全く人の気配がない。まさにガンガーが世界全体であるかのような錯覚を覚えた。

無窮なる沈黙の闇呑み込みて死を湛へたる真夜のガンガー

薄紅き残照をすべて黙らせて真夜のガンガーは人寄せ付けず

ガンガーにぼつねんと浮かぶ舟二艘真夜の灯に死臭含みて

十二月三十一日

なぜか入学式の夢で眼が覚めた。時計を見ると五時半である。シャワーを浴びようとチェックしてみると大丈夫。お湯は出る。で、石鹸をと思ったたら石鹸がない。あちこちごそごそと探していたら木村さんを起こしてしまった。荷物をひっくり返し、部屋中をくまなく探しても見つからない。このような単純な遺失をするのがこのところの加齢現象だ。つくづく厭になる。やむを得ず石鹸は使わずに済ませた。お湯があればそれでじゅうぶんきれいになる。

次いで木村さんがシャワーに入った。この時何と石鹸が発見された。木村さんの石鹸と同じ場所に置いてあったのだ。それでその上に木村さんの荷物が置いてあったのだ。何とも考えのない物の始末をしているのだろう。何かをするときに考えながらするという習慣を身につけなければならぬ。無意識、無自覚に行動しすぎなのだ。大いに反省する。

夜が明けてきたので、再びガンガーを拝む。朝のガンガーは世界の目覚めでもある。初めてここに来たときに見た印度政府のパンフレットにこんな一文があった。

+++++

日の出直後、川辺のガートがある大きな円形の場所は、突然活動を始めます。ヤシの葉でできた大きな傘の下では巡礼者が所定の位置につきます。朝の張り詰めた全体論的な雰囲気の中、由緒あるブラーミン(パンダとして知られる)は、聖典の一節を朗読し、僧侶は、神への崇拜の印に聖なる灰を巡礼者に振りかけます。

(インド政府観光局「VISIT VARANASI」より)

+++++

七時過ぎにわらわらとメンバーは集まってきた。チェックアウトを済ませしばらく待つと迎えが来た。彼に従って早朝のバラナシの街をかき分けていく。けっこう小綺麗なバスが僕らを待っていた。乗務員は三人。運転手はわかるがそれぞれに役割はあるようだ。彼らがインドを離れるまでのわれわれの頼りとなるのだ。

バスは走り出した。木村さんの話によればきれいな道路ができてかなりスピーディに快適な移動ができるようになったということだ。みんなばたばたと寝不足を補うように眠りはじめていく。

苑田、中西両君が短歌を作り始めた。指を折り折り三十一文字に体験を詠み込んでいる。若いということはいい。真綿に水が染み込むように世界が彼女たちの身体に吸い込まれ、三十一文字のリズムとなって産み出されてくる。ぎこちないなりに何とか作り上げているが急速に上達していくのがわかる。帰国したら相聞歌を詠むといいだろう。羨ましいが、若い人たちの特権でもある。

突然車が停車した。どうやら州境を越える手続きを行っているらしい。州というのはそういうものらしい。日本でも道州制なんぞというものを構想している人たちがいるようだ、それはこういうことになることかもしれない。関門海峡で通行手形をチェックして通行料を払うみたい

に。

高速道路に入る。料金所では料金を払い、なにやら証明書のようなものを受け取り、2,3メートル先で今度はその証明書みたいなものを示して確認を受けると、さらにその先の柵をどけて通らせてくれる。一台の車が通過するのに数人の人手がかかるようになっていて。このワークシエアリングがインドらしさとても言うのだろうか。

やがて、誰かの訴えてトイレ休憩となった。バスは中央分離帯の途切れたところで対向車線に入り、数十メートル先でUターンするようにドライブインに入った。Uターンして入ったのは再び道路に出るための工夫である。ドライブインの駐車場の端に子どもたちが10数人が群れている。われわれと視線が合うとリーダーっぽい男の子が指図をして仲間を操り、駐車場と隣地の境目あたりに記念写真でも撮るときのように整列し、何かを要求していた。よくわからないし、適当にスルーせざるを得なかった。たぶん観光客を相手に彼らなりの遊びをしていたのだろう。

再び高速道路に戻った。高速道路の路肩を人が歩いている。自転車もところと走っている。そんなのどかな光景をぼんやり見ていたが、それは日本ではおかしい光景であった。いや、僕が日々利用している3号線は中央分離帯で仕切られていて、ほぼ車専用の道路だ。通称バイパスと称しているが、この高速道路もそれとよく似た構造になっている。道路脇には歩行者用の歩道がある。そこでそこを通る人はいるが、車道に入る人はいない。やがて道路の右側、つまり追い越し車線側を前方からバイクが走って来るではないか。

「あれ？」

不審に思っ、木村さんに問いかけた。

「対向車線はあっちにあるよね。そしたらこれは逆走とでも言うのかい。」

「そ、そういうことですね。あつ、リクシャも来ますよ。」

僕は先頭の木村さんのすわっている座席の隣に移り、カメラをかまえた。これはもちろん動画モードでだ。すごい。次々と逆走車がやってくる。かなり迫力のある動画が撮れたと思う。日本では考えられない事態だが、これが日常であるとなればどうということはない。お互いに配慮し合い、決して怒らない（怒る理由になっていない）し、当然事故もそうそう起きるわけでもない（起きないとは言えない）。日本では逆走しないことが前提だから一台でも逆走車があればまず確実に事故になるだろう。想定していないからだ。

このあたりに文化のちがいがいというものがあるのだろう。これを認め合うというのは無理だ。理解しあうのもかなりきびしい。それぞれに受け入れるしかないのだ。ま、お互いに郷に入れば郷に従え、ということかな。

インドではやたらとクラクションを鳴らして走る。それは我々には喧しいとしか映らないし、もし日本でああいうふうにクラクションを鳴らされたら間違いないく険悪な雰囲気になり、ややもすると刃傷沙汰にもなりかねない。それは我々のシステムがクラクションを鳴らさなくてもいいものになっているからである。信号はたくさんあるし、みんなそれを守る。車線もきちんと守る。

しかし、インドではそういう約束はできていない。制限速度はあるのかもしれないが、その表示は見たことがない。中央線というものも厳密とは言えない。時として車線が意味を失うことがあるし、そのことを誰も咎めたりはしていない。車の動きを見ていると無原則にクラクションを鳴らしているのではない。自分の車が前へ進もうとしたとき、そこに何かがあったり、何かが入ってこようとしたときにクラクションを鳴らす。今そこへ進むぞ、という意思表示であり、注意を喚起するための情報提供であって、自分のいらだちやもたついた相手に対する怒りをぶつけているのでは

ない。ほとんどのトラックの背には「BLOW HORN」と記してあり、追い抜くときにはクラクションで知らせるのがマナーなのである。クラクションに関して言えば、インドでは善意、日本では悪意の表明なのである。

ところで、今日は高速道路を走っているが、ほとんど有料通行者はトラックかバスである。乗用車はまれだ。高速道路とは言っても日本で言えば自動車専用のバイパスのような感じだ。間に中央分離帯がおかれて上下行が分かれており、片側二車線である。しかし、高速道路には外側からの進入を阻止する手段は講じられていない。さりげなく店舗も建っており、トラックやバスではない客が屯している。それ故に路肩を人が歩き、自転車も走っている。バイクやオートリクシャも走っている。それらは近距離利用の乗り物であり、高速道路はたまたま便利な近道として使っている。自転車に交通ルールは適用されていないようだ。だから様々な移動物が走ることになるのだ。これら諸々の移動物は単に近道として高速道路を利用するので都合がよければ逆走してくる。逆走は常識のようだ。

僕らの乗っているバスは反対車線の側にあるドライブインに入ることになった。日本の（高速ではあり得ないが、一般道で上下の道が分かれている場合）道路ならば、そのまま走り、中央分離帯が途切れたところでUターンして目指す店に入るだろう。しかし、我々の乗ったバスは手前の中央分離帯が途切れたところで反対側の車線に入り、店の入口にUターンするように入ったのだ。そういうのが道路の使い方の考え方なので逆走は何とも思っていない。

しばらく走ると、高速道路を出て一般道に出た。今度はチキンレースだ。バスはぐいぐい遅い車を追い抜いていく。当然対向車線に入る。向こうから車がやってくるが、ぎりぎりまで右車線を走って追い抜きをかけ、左車線にもぐり込む。時々さっき抜いた車が抜き返していく。別に述べたように追い抜くときにはクラクションを鳴らすから、抜かれじと意地を張ることはない。また次のチャンスに抜けばいいのだという感じである。

午後一時をまわったころ Delta International Hotel に到着した。「おおおー！」と歓声を上げるほど印度では珍しく小綺麗なホテルだ。チェックイン手続きの間、ロビーでくつろぐ。中庭もすてきだ。

ちともよおしたのでトイレに行く。入ってみると、な、な、なんだ！小用のトイレなのだが、異常に背の高い、ていうか足の長いというか、僕はつま先立ちでがんばってみてようやく何とか用が足せたくらいである。そういうわけで、森川さんに見ていただいたが、どうやら彼には使用は無理なようだった。

それぞれの部屋に荷を解き、レストランで昼食を摂った。まあ、印度名物 chowmin をいただくことにした。まあ、その分量の多いこと。うっぱというほど食べてもまだもてあましてしまった。葉味がついていて柚子胡椒みたいな唐辛子やチリソースなんかもあったし、辛い酢みtainなものもあったが、黒いところとしたのが実に美味かった。

「いったいこいつは何だろうか」

首をかしげて考え込んでいたら誰かが「黒蜜じゃないの」と教えてくれた。うむ、確かに黒蜜だ。これがいい。日本でもソース焼きそばに黒蜜をやってみた。

二時半にバスでブッダガヤに向かう。ブッダガヤはすごい混雑であり、障害者の物乞いが何人かいた。中には人為的な障害だろうと思われる子どもがいた。胸が痛むというより、やはりインドの現実を見てしまったというところだ。胸が痛むだけではすまないし、だからといってここで施しをすることがよけい彼らの罪に荷担するようでもあり、結局目を背けてしまう旅行者の位置にい

る自分を確認せざるを得なかった。

入り口で靴を預け、中に入る。ものすごい人の波で、本堂へは並んでお参りをした。出がけに供物のお裾分けの菓子などをいただく。いろんな民族の、いろんな言語の人たちが集まってきている。ぐるりと周囲をまわり、仏陀が悟りをひらいたという場所にも行ってみたが、ぎっしり人がすわり、それぞれの言語で経典を読んでいる。今日は何か特別の日のようだ。本堂を出て外側の回廊を歩いて行く。外から中に格子の間から物乞いが手をさしのべてくる。その数は半端ではない。幾百もの手が壁に生えて蠢いている状態を想像するといいい。木村さんの機転で先ほどいただいた供物のお裾分けを差し出された手に少しずつ渡していった。これで仏の慈悲は衆生に伝わったであろう。

一通り団体行動による見物を終え、一時間ほど自由時間とした。買い物をしてもいいのだが、これといって買いたいものもなかったので、適当に店を素見して時間を潰した。

四時半に集合し、バスに移動する。そう言えばスジャータ村があつたな、と言うことで行ってみることにした。そしたら運転手がいらない。時間は時間なので別の乗組員が運転を代行してスジャータ村に向かった。ちなみに運転手はリクシヤで後から追っかけてきた。

十年前に來たときは村はずいぶんと変貌していた。学校らしきものが建ち若者が寄ってきて案内をしたがる。以前はなかったバイクもある。子どもたちはペンを欲しがる。そして一様に日本語をしゃべる。なぜか日本語学校の看板もある。彼らの身なりや身の処し方を見る限り暮らしは豊かになっていることは間違いない。そしてバイクにまたがっている青年も亜案内をしたがる青年ももしかして十年前には好学の少年としてここにいたのだろうか。

ボールペンの一、二本を置いていっても、と思ったが、木村さんが眼で制止する。聞けばボールペンも横流ししている疑いもあるという。ま、疑えばキリはないが、モノをばらまく観光客というスタイルは慎むことにした。われわれは通りすがりの異邦人にすぎない。英語で書けば *visitor* だ。ここにはいない者として振る舞うのがたしなみかもしれない。

そうこうしてホテルに戻った。木村さんも他のメンバーもチャイダか買い物だかで出払っていった。僕はシャワーを浴び、選択をすることにした。いい湯だ。高級感あふれるホテルに潤沢な湯でシャワーを浴びる。旅の疲れは芯から溶けて流れ出ていくようだった。

やがて木村さんたちがわらわらと帰ってきた。

「いい湯だよ」

と勧めて僕はベッドでくつろぐ。シャワーに入った木村さんが「あわわ」と飛び出してきた。

「お湯が出ないー」

他の部屋でも湯が出ないと叫んでいる。そしてあーだこーだと言い合い、要はみんなが一度に使ったからだろうという結論になった。

夕食はホテルでとることにした。ていうか、周辺にはレストランのようなものは見なかったから、それしか選択肢はないも同然ではあつたが。レストランで顔を合わせると久々にビデオを撮つた。で、このような豪華なホテルならではの半ば期待してボーイに聞いてみると、やったあービールがあると言う。それではどんなのかを聞くと現物を持って来て見せてくれた。キングフィッシュのロング缶だ。森川さんとはしゃぐようにいただいた。ついつい日本ずついただいてしまった。

食事中、日本時間での新年を迎える。とりあえず明けましておめでとう、だ。

食事から戻ると湯の工事をするとか言って、従業員が各部屋に入り何かガタガタやりはじめた。一騒ぎして彼らの姿は消えたけれど事態は何も変わってはいなかった。やはりお湯は出ない

のだ。僕はたっぷり湯を楽しんだけれど木村さんは…

一月一日

★